

waiting for snow white

# 白雪姫を待ちながら

植物状態の妻を介護しつづける男



福田寿之（当時三九歳）が寝室に入ると、妻の明美（当時三五歳）はすでにベッドで目を閉じていた。時刻は夜十時。普段は福田の方が早く眠るのだが、この日に限って妻の方が早く床に入っていた。二〇〇六年三月二四日のことだった。枕に顔をうずめ、うつぶせで眠っている明美を見て、福田は思わず声をかけた。

「よくうつぶせで寝られるねえ」

「……私は昔からうつぶせでも寝られるんだ」

寝ぼけた声で返事が返ってきた。それが、ふたりが交わした最後の会話になった。福田もベッドに入り、眠りについた。深夜一時頃、ふと隣から奇妙な音が聞こえてきて、福田は目を覚ました。

「ヒック、どううううん……」

音は妻の口から発せられていた。しゃっくりとイビキのようでもあるが、今まで聞いたことのない音だった。普段から寝言を言うことが多い妻が、また寝ぼけているんだな、くらいにしか思わず、再び目を閉じたが、やはり気にかかった。

「あっちゃん？」

声をかけても反応はなかった。ゆすつてみても目を覚まさない。まさかと思い手首

に触れても、脈を感じられなかった。初めて事の大きさに気付いた福田は、慌てて救急車を呼んだ。電話に出た救急隊の指示に従い、心臓マッサージと人工呼吸をほこしたが、心臓が動き出す気配はなかった。焦りだけが募っていく。五分ほどで救急車は到着したが、その間は数時間にも感じられた。

救急隊員はAEDで電気ショック治療をした後、心臓マッサージをして、明美を救急車に乗せた。福田も一緒に救急車に乗った。妻の心臓が再び動き出したのかはわからなかった。到着した公立病院で、妻はすぐさま手術室へ運ばれていった。病院は横浜だったが、静岡にいる妻の両親へ電話をして状況を説明すると、すぐに駆けつけるとのことだった。待合室にいると医師がやって来て、「心臓に血栓ができています。ですが、まだはつきりしたことは分からない」と告げられた。緊急手術を受けた妻は、集中治療室へ運ばれて来た。病室で、思いのほか穏やかな表情で眠っている妻と、心電図のモニターが動いているのが見えて、福田は安堵した。すぐ元気になり、いつもと変わらない生活が始まると思っていた。まさか妻が毒りんごを食べた白雪姫のように、長い眠りに入るとは思いもしなかった。

「死戦期呼吸、っていうらしいんです」

八年前の夜に妻が発したイビキのような呼吸を、四六歳になった福田はそう説明した。

「心臓は止まっている状態だけど、呼吸は残っている。本当は死んだ直後の人がする呼吸だと医者に聞きました」

十月のとある日曜日の昼下がり。僕は静岡県にある彼の家にお邪魔し、テーブルに向かい合って座っていた。まだ新築の良い香りがする家は、二〇一一年九月に、妻の介護のために建てられた家だ。完全バリアフリーで、車椅子の妻を運ぶためのエレベーターも付いている。僕たちのすぐそばには、車椅子に横たわっている四三歳の明美がいる。目は開いており、時折眼球も動く。だが、視界に映るものを認識しているのかは分からない。口も開いたままで、両腕は内側に曲がっている。彼女が遷延性意識障害、いわゆる植物状態になって、七年半が過ぎていた。幾つかの病院に三年ほど入院した後、現在は在宅で介護を受けている。

「意識が戻らないまま、入院して一週間くらいしたところで、医者に言われたんです。

非常に重篤な状態です、もうこの人が回復するのは難しい、と」

明美は「たこつぼ型心筋症」を発症した可能性があるというのが医師の見解だった。たこつぼ型心筋症とは、心臓の筋肉が収縮しにくくなり、ポンプとしての機能が低下するため、正常に血液を送り出すことができなくなる病気だ。明美の場合、一時的に心肺が停止したため、脳への酸素供給が途絶えた状態、いわゆる低酸素脳症になり、脳がダメージを受けてしまったのだ。手術後に脳のCTスキャンをした結果、広範囲に萎縮が認められていた。尊厳死という選択肢もある、と医者は宣告したが、福田は受け入れられなかったという。

「すごく痛くて苦しい。生きていることが辛い。そういう状態で、完全に回復する可能性がないと言われたら、それはもう死なせてあげてもいいと思うんです。ただ、妻はまた意識が戻って、普通の状態になってくれると信じていましたので、尊厳死は考えられませんでした」

福田はそう言って明美を見る。見守るような優しい眼差しでも、憐れむ眼差しでもない。すぐそばに当たり前のようにいるパートナーを、いつものように見る眼差しだった。

「意識が戻る確率はどのくらいなんですか？」  
僕は尋ねる。

「この状態になってしまうと、百人にひとり、一パーセントしか意識は戻らないそうです。それもスタスタ歩いて普通に話ができる状態ではなく、寝たきりで体を動かさないけれど、何とか意思疎通ができる状態に戻る確率が一パーセントだそうです」

脳外科の先生に言わせると、と福田は言葉を続ける。

「妻の脳の血流は年々落ちていくんです。このレベルで思考能力はほとんどないでしょう、という話でした。ただ、脳の神経細胞が全て死んでいるわけじゃない。細胞が一個でも生きているからには、必ず何か感じているはずだと僕は思っているんです」  
福田はそう言って、明美の目の前で手を叩いた。驚いたように、その目が一瞬閉じられた。確実に音に反応した証拠だった。

「退院したばかりのときは、まったく反応がなかったんです。目の前で手を叩いても、触っても。けれど今は、大きな音がすれば目を閉じますし、急に泣き出すこともあるんです。眠っていても、来客があると人の気配を感じて目を覚ますこともあります。親友がお見舞いに来てくれたときは、帰った後に『あー』って声を出したんです。確

実に反応していると思うんですよ。あと十年くらい経って、再生医療が発達すれば、必ずもう一回話ができるようになると信じています」

福田はそう言って、小さく笑顔を見せた。

「そう思っていないと、七年半も世話はできないですよ。また話ができると信じていることが、日々のモチベーションになっているんです」

空は晴れ渡り、窓から暖かい日差しが差し込んでいる。その先には、一パーセントの確率でしか目覚めることのない明美と、彼女の目覚めを待ち続ける夫がいる。

福田と明美は、勤務先の会社で職場結婚をした。横浜にある化粧品メーカーだった。福田が入社したのは一九九一年。その二年後に明美が入社した。新入社員は、研修でいろいろな研究室を二週間ずつ体験する。福田が所属していたのは、機能的食品の素材探索を行う研究室。そこに研修で明美がやって来たのだった。

「僕が先輩として彼女の面倒を見たんです。最初に会ったときは、どうだったかなあ。元気のいい人だなあ、って感じてはしたかね。第一印象は悪くもないし、特に良いって

わけでもなかったです」

福田のその言葉通り、当時は一緒に研究をしたり、歓迎会で少し話をしたりしたくらいで、特別親密にはならなかった。明美も香料を採取したり、花を販売したりする植物事業の部署に配属されたため、交流はほとんどなかった。だが二年後に行われた組織改正によって同じ部署になり、久しぶりに再会したふたりはたちまち仲良くなった。仲がより深まったのは、福田が開催したホームパーティーだった。料理が好きな福田は、当時同僚たちをよく自宅アパートに招いて、自慢の腕をふるっていた。その話を聞きつけた明美が「私も行きたい!」と熱望したため、彼女も数人の同僚と一緒に福田の部屋に招かれた。

「そのときは和食を作りました。魚を買ってきてさばいたり、手作りのがんもどきを作ったりしました。自分で言うのも何ですけど、手の込んだ料理で、見た目だけは本格的なものを作ったんです。彼女も美味しい!って食べてくれましたね」

同僚の間では、料理上手の福田というイメージがすっかり定着していた。女性社員たちも福田にはかなわないと思っているのか、手料理でお返しをすることはなかったが、明美だけは違った。あるとき、彼女は福田に言った。

「今度は私が何か作るから、家に来てよ」

いつも料理を振る舞ってばかりの福田が、逆にもてなされるのは、とても新鮮な感覚だったという。明美が出した料理は肉じゃがなどの家庭料理が中心。特別に上手なわけではなく、福田が作る料理とは明らかにレベルが違った。だがそんなことをまるで気にせず、福田を精一杯もてなそうとする彼女の、ある種の無謀さが印象に残ったという。明美の部屋で、どことなく緊張していた福田は、何を話したかあまり覚えていない。だが、そこからふたりは急速に親密になっていった。

「彼女が好意を寄せてくれることには気付いていました。僕も、彼女に対して同じ思いになっていましたね。告白したのは僕の方からです」

そしてふたりは恋人になった。最初に会ってから約二年半が経った、一九九五年の秋だった。ふたりはあつちゃん、としちゃんと互いのことを呼び合った。横浜のお洒落なレストランや、ドイツ・ニーランドなどにデートに行き、愛を育んだ。福田は元々男女の駆け引きが得意ではなく、気になる子がいたとしても、ライバルが出現するとすぐ引いてしまう。そんな性格のため、恋愛はあまりうまくいったことがないという。一方の明美も、なかなか理想の恋人と巡り合えず、「このままずっとひとりかも……」

と弱音を吐くことがあったほど。そんなふたりは、翌年の春、会社のお花見の席で交際していることを発表するつもりだった。が、元々結婚を前提に付き合い始めたふたりである。交際報告ではなく婚約報告にしようということになった。桜が咲き乱れる中、同僚たちから大きな祝福を受けたことは言うまでもない。そしてその年の秋に、ふたりは晴れて入籍した。福田が三十歳、明美が二六歳。会社がある横浜にマンションを借り、新婚生活が始まった。

結婚式は、福田の故郷である岡山県の岡山神社で挙げた。彼の両親が結婚式を挙げた場所だった。新郎のあいさつで、福田はふたりが巡り合った偶然について話したという。大学するとき、入る研究室をクジで決めたところ、福田は一番人気がない研究室に入るハメになった。一方、別の大学だった明美も同様にクジで外れたため、不人気の研究室に入った。だがそれぞれの研究室は、ふたりの勤務先である化粧品メーカーと繋がりがあったため、ふたりともその縁で入社したのだった。

「僕たちはクジで外れた研究室に入り、同じ会社に入社しました。そして新人研修で出会い、一緒になりました。もしあのときのクジが外れていなかったら、僕たちは出会わなかったかもしれない。まったく違う人生をそれぞれ送っていたかもしれない。

ものすごい偶然の中で僕たちは出会ったんです。その偶然を、僕は大事にします」

結婚式の翌日、ふたりは横浜に帰る途中に熱海の旅館に泊まった。熱海といえば、一昔前の新婚旅行先の定番スポットだ。新婚旅行は熱海に行ったんですよ、と洒落で他人に言いたくて立ち寄ったのだそう。奮発して、一泊で十五万円もする旅館を選んだ。離れがあり、専用の露天風呂もある。窓の外の庭には舞台があり、ふたりのためだけに伝統芸能の舞も披露された。海の幸が満載の美味しい料理に温泉と、大満足の新婚旅行だった。順風満帆すぎる結婚生活がスタートした。

ふたりが勤めていた会社は、同じ部署の社員同士が結婚したら、どちらかが別部署に異動するという暗黙のルールがあった。明美は別の部署に異動したが、馴染めずに結局退職した。薬剤師の資格を持っていた彼女は薬局で働き始め、本当の意味での新たな日々が始まった。

仲は良いけれど、そんなにべったりの夫婦でもない、と福田は言う。

「よく僕らのエピソードとして言うのは、一緒にシネコンに行っても、別々の映画を

観るんですよ。僕は『スター・ウォーズ』みたいなSF系が好きで、彼女は『踊る大捜査線』とかドラマの映画版が好きなんです。だから別々に映画を観て、終わったら待ち合わせてご飯を食べて家に帰る。それでふたりとも満足なんですよね。ほかの人に言うとは驚かれることがあるんですけど、僕たちはずっと一緒にいるというより、独立した夫婦ですね」

でも、と福田は言葉が続ける。一緒に歩くときは手を繋いで歩く、そんな夫婦です、と笑った。お互いを縛り付けることなく、強制もしない。程良い距離感のある関係性。そんなふたりなら、ケンカもあまりしなかったのだろうか。

「大ゲンカはなかったですけど、僕はあまり喋る方じゃないですから、それがちよつと不満だったみたいです。何か言われても『うん』『そう』と答えて終わりのことが多かったですからね。その日にあった出来事とか、もっと喋って欲しいとたまに言われました」

隣で聞いている明美は、反応を示さない。だが、「その通り」と内心で思っているのだろうか。福田は笑顔になって、攻守交代とばかりに妻への不満を口にする。

「でも、この人もガサツなところがあるんですよ。椅子に座るときも、普通に座ればいいのに、ぴょんって飛んで座るんです。だからホコリが飛ぶし、物も落ちるし、転んだりもする。そういうところが僕は少し不満でしたね。結婚して住み始めたマンションでも、床や壁にすぐ傷をつけるし。高いお皿の五枚セットがあったんですけど、それもことごとく割られて、今は二枚しか残っていないんです」

不満というより、ノロケ話をしているかのように、福田は楽しそうな笑顔を浮かべる。お互い仕事は順調で、夫婦仲も円満。何ひとつ問題がないように見える夫婦生活だったが、異変の兆候は少しずつ見られるようになった。

「しばらくはお互いに仕事を一生懸命やって、生活も楽しんで、それから子どもを作ろうって話していたんです。何年か経って、そろそろってときに、彼女が婦人系の病気になるってしまって」

意識不明になったあの夜の三年ほど前から、明美は生理が来ないことが多くなったほか、夜中に突然どこかに電話をかけようとしていたり、トイレに行こうとして壁に頭をぶつけたりと、変わった行動が増えるようになった。急に強い眠気がやって来て二、三日眠って過ごすようなこともあった。ある夜、福田が家に帰ると、明美が床に倒れるようにして眠っていたことがあったという。病院に行くと、若年性更年期障害と診

断された。どうやら仕事でストレスがあったようで、ホルモンバランスが不安定な状態になっていたそうだ。

「仕事を休ませて、一年間ホルモン補充療法を行ったところ、生理も順調に来るようになりました。慢性的な疾患なので、うまく付き合っていけば問題ないだろうと、そろそろ仕事に復帰しようかとも話していたんです。それで、子どもも作ろうと話していたときに、心肺停止になってしまって。ひよっとしたらこの頃には、心臓がもうおかしかったのかもしれない。今となっては分からないんですけどね……」

「クシヨン！」

不意に明美がクシヤミをした。遷延性意識障害、つまり植物状態と聞くと、完全に寝たきりの状態をイメージしてしまう。だが明美には、寝たきりという言葉は相応しくないように思える。確かに、言語や行動としては意思を表してはいないが、身体的機能は間違いなく残っている。白雪姫は、毒りんごを食べさせられたことで長い眠りについたが、死んだわけではない。りんごが喉から飛び出した拍子に目を覚まし、元通りになった。同様に、何かの拍子——それが何かは分からないが、何かの拍子で意識が戻る可能性が一パーセントでもあるからこそ、福田は明美の介護を続けているの

だ。ただ、童話と違う点が一点ある。王子様と出会ったその日に白雪姫は目を覚ました。明美は七年半も目を覚ましていない。王子様だったら、七年半も姫の世話をし続けるだろうか？そして僕は、自分の愛する人が意識不明になり、回復する可能性が一パーセントと言われたら、どうするだろうか？まるで想像がつかなかったが、その問いに対し、ひとつの答えを出した男が目の前にいる。彼は淡々とした口調で、表情もあまり変えず、インタビュアーに答え続けている。

「ちよつとすいません」

福田は時計を見て立ち上がった。流しに行き、注射器のような容器に白い液体を入れて、明美の腹部から伸びる管に注入していく。

「飲むヨーグルトです。あげると、多少お通じが良くなるんです。元気な頃は、炭酸飲料とかビールとかかき氷とか好きだったので、本当は物足りないかな、とは思うんですけどね」

誤嚥ごえんすると大変なことになるため、口から物を食べさせることはできない。食事は



毎日時間を決めて、このように管を通して流動食を食べさせているという。福田の手つきはすっかり慣れた様子だ。そのことを伝えてみる。

「病院に入院していたときに、看護師さんがするのをずっと見ていたので覚ええました。たまにタンの吸引もするんですけど、それは難しいんです。喉に穴を開けている人はやりやすいんですけど、妻の場合は吸引器を口や鼻から入れたりするので、タンが完全には取れないんですね。ほかにも摘便ってあって、ウンチを指でかき出すんですけど、それも医療行為ですが看護師さんより上手いですよ」

美味しいコーヒーの淹れ方を話さかのような口調で福田は言う。妻が倒れてから、自然と身に付いた介護・看護技術。現在、朝・昼・夕と一日に三回ヘルパーが来て、風呂やおむつ交換などの生活介助を受けているが、それ以外の時間は全て福田が介助をしているという。前述の生活介助をはじめ、就寝中に二時間おきに目を覚まして、妻の姿勢を変えるのも大事な役割だ。熟睡できないため、昼間もずっと眠たいのだから。何かあればすぐ対応できるように、常に妻のそばにいない必要があるため、友人たちとも疎遠になってしまった。ひとりで夕食をしても美味しくないと、妻に申し訳ない気持ちが出てしまったため、食事は自炊するようになった。風邪を引くと妻の面倒を

見られなくなるため、人ごみに出ることもない。神社巡りが好きだったが、妻が倒れて以来「神様は何てひどいことをするんだ」と、お参りに行くこともなくなった。二〇〇六年のあの夜を境に、福田のライフスタイルはまったく違ったものになったという。

「倒れた後、妻は横浜の病院に入院しました。最初の一週間は、仕事を休んでずつつきつきりでした。その後は、朝に病院に行つて様子を見てから会社に行つて、仕事が終わつたらまた病院に行く、という生活でした。ただ、さすがにその生活を続けるのが大変になったので、妻の両親が住んでいる静岡の病院に移ったんです。平日は横浜、週末は静岡の病院に行くつていう生活を送っていました」

病院からは随時、妻の状態を知らせるメールが送られてきた。幸い、容体が悪化したという報告は届かなかったが、医者から「いつ何があつておかしくないから、覚悟はしておいてほしい」と言われていたため、仕事をしている最中も妻のことが気になって仕方なかった。周囲は「大変ですね」と同情してくれたが、長期間になつてくると、変化が現れるようになった。介護のために仕事を早退したり、休んだりすると、「またか」という目で見られるのだ。もちろん、自分の仕事はちゃんとこなしていたつも

りだったが、やがて福田は降格させられたという。

「仕事をしながら妻を介護するという大変な生活をしているんですが、社会からはそう見られないんですね。意識がないって本当に重篤な状態で、そういう人が家にいるっていう暮らしは、想像がつかないと思うんです。特に僕の世代は、家庭より仕事を優先する傾向がありますし、それができないのなら仕方ないね、という目で見るのが辛かったです」

結局、福田は二十年務めた化粧品メーカーを退社。妻の介護に注力するため、静岡県で再就職先を探した。住居も静岡に移し、現在はお茶の会社の研究所で働いている。会社には事情をあらかじめ伝えてあるため、残業も転勤も休日出勤もなしという条件だ。だが、お茶のシーズンであるゴールデン・ウィークなど、繁忙期でも介護を優先する福田に、時折周囲からの冷めた視線が刺さることがあるという。

入院中はもちろん、在宅になった今でも、明美の友人や元同僚がお見舞いに来てくれることがある。彼ら彼女らの多くは、意識不明になった後の妻を初めて見たとき、

驚き泣き崩れるようだ。友人たちのイメージの中で、明美は元気な姿をしている。だからこそ、変わり果てた姿を見てショックを受けるのだろう。一方、福田は妻が倒れてから一度も泣いたことがないという。福田にとって明美は、元気な頃の姿ではなく、遷延性意識障害を発症した後の姿に変わりつつあるのも、ひとつの理由だろう。

「倒れたばかりの頃、夢に出てくる彼女は普通の彼女だったんですけど、いつからか夢の中でも寝たきりになってしまいましたね。たまに夢の中で、彼女が急に喋り出すことがあるんですが、そうすると逆にビックリするんですよ」

もしかしたら深刻さを実感できていないためかもしれません、と福田は話す。

「妻はもうダメだ、と思ったことはありません。まだ脳の機能は残っていますし、すごく苦しんでいる様子もない。だから、重篤さを実感する場面がないんです。いくら呼びかけても反応してくれない、っていうだけです。それに、この先妻がどうなるかまったく読めないで、目の前の現実をこなしていくしかないんです。妻が倒れて緊急事態になって、それが毎日続いている感じなので、泣いたり悲しんだりする場面というのはなかったんです。感覚が麻痺しているのかもしれないんですけど、今の状態が日常で、当たり前なんですよね」

実際、悲観している暇すらないほど、福田には多くのすべきことが課せられるようになった。妻の状態や意識障害について調べ、少しでも改善するような方法がないか探し回った。そして、意識が戻る可能性が増えるならばと、あらゆることを試した。例えば、楽器の生演奏に合わせて、トランポリンで上下運動を行うことで五感を刺激し、意識の回復を促進する「音楽運動療法」というメソッドがそのひとつ。家庭で行うため、CDプレイヤーで音楽をかけながら、バランスボールの上に妻を乗せて上下させる、というアレンジ版だ。リズムカルに縦揺れを行うと、バランスを保とうとして、明美の全身には力が入るといふ。妻が子どもの頃に読んだ本や、お気に入りの本を朗読して聞かせることも続けている。不思議なことに、怖い場面やハラハラする場面になると、泣き出すことがあるという。一番反応を示したのは、妻の祖父が残した日記だった。妻が誕生してから、三歳頃までの成長記録が克明に書いてあったその日記を読んで聞かせると、笑いだしたり、泣き出したりという反応があったという。また散歩に連れて行くと、周りを伺っているような様子を見せることがあるため、できるだけ多く連れて行くようにしている。

大変なのは介護だけではない。現実問題として、多額のお金もかかる。DCS療法という治療法で、意識が戻る可能性があると聞いて、その手術を行ったことがあった。DCS療法とは、脊髄に電極を埋め込み、腹部に埋め込んだ電池から弱い電流を流して、脳を刺激する療法だ。半分は保険が下りたが、それでも費用は総額三百五十万円ほどかかったという。結局、妻の意識も元には戻らなかった。ほかに車椅子でも乗れる福祉車両や、介護生活のために新築で建てた現在の住居、様々な介護用品も、高額な費用がかかっている。明美は重度障害者と認定されているため、医療費やヘルパーの費用はかからないが、それでも決して少なくない額の出費があることは事実だ。

また金銭面以外にも、将来的に誰が明美を介護するか、という問題もある。「僕が仕事に行っている間は、妻の両親が面倒を見ていますが、ふたりとも七十歳近いものですから、現実的にずっと面倒を見て無理ですよ。どうしても先に亡くなってしまいますから。だから、僕は五五歳になったら仕事を辞めて、妻の介護に専念しようと思っているんです。それまでに蓄えを作って、年金まで持たせたいと考えています」

将来のことを考えると、一番不安を感じる、と福田は吐露する。日本は少子高齢化を迎え、介護者の不足が深刻だが、同じ問題は福田たちのところにも例外でなくふり

かかっているのだ。

「僕はふたり兄弟で、兄貴は東京にいます。両親は岡山にふたりで暮らしていて、いつか介護が必要になるのかなと考えるのですが、とてもできませんよ。僕は妻がいる限り介護をしていくので、そっちまで面倒を見切れない。けれど、誰かがしないといけないじゃないですか。そうなったときにどうするのか、考えられないです」

聞けば聞くほど、様々な問題が負担となって福田にのしかかっている。愛する妻を支えるためとはいえ、あまりにも酷な運命ではないだろうか。離婚して新しい人を見つける、という考えはなかったのか、失礼を承知で質問したが、福田は首を振った。

「親子は一等親の関係ですけど、夫婦はゼロ。他人ではありますが、ひとつの単位だと思っています。この人が病気になるったら、僕はそばにとどまって一緒にいるという選択肢しかありません。これは希望ですけど、もし僕が意識不明になって、妻が世話をする立場になったとしても、やっぱり同じだと思えます」

「それはやっぱり、奥様に対して愛情があるからですか？」

僕は尋ねた。あるいは詰問する口調になっていたかもしれない。YESと答えて欲しかった。そうでなければ、こちらの心が折れてしまいそうだった。福田は表情

を変えず、ゆつくりと口を開く。

「僕が世話をしなきゃいけない、っていう義務感なのかもしれないですね。けれど、愛情があるからこそ義務感もあるんだと思います。例えば下の世話をしても、報酬をもらえないわけではないし、お礼も言ってもらえない。無償の愛というか、愛情がなければできないことをしていると思うんです。恋愛だと、何かしてあげた見返りに何か欲しい、という期待がありますが、そんなものはありませんから」

ほかに気になる女性もおらず、浮気もする気もないという。

「若い連中が楽しそうにデートしているのを見ると、すごく羨ましく見えるんですけど、自分はそうするつもりはないですね。もし妻が亡くなったら、って考えたこともありません。最初の頃だったら、ひとりでは何なので再婚したかもしれないですけど、一年半も一生懸命やってきましたからね。新しい恋をするにしても、もう恋愛の駆け引きはしたくないですし、今からは考えられません」

日が落ち、辺りは少しずつ暗くなり始めていた。点けっぱなしのテレビでは、明美が好きな「嵐」のコンサート映像が流れている。少しでも良い刺激になればと、よくDVDを流しているのだそうだ。妻はジャニーズ系が好きなんです、と福田が言った。

「S M A PとかK i n k i K i d sとか。友達にファンクラブの人がいて、一緒にコンサートに行ったらすごく良かったらしくて、ファンになったみたいです。僕はあまり興味がなかったのですが、C DやD V Dをずっとかけていたので、すっかり曲を覚えてしまいましたよ」

嵐のコンサートに連れて行ったら、意識が戻るかもしれないですね。福田はそう言って笑った。嵐は「O N E L O V E」を、テレビの中で歌っていた。甘い愛の歌だった。このような暮らしの中、自己を犠牲にし、全てを妻のために捧げている福田が、日常で幸せだと感じるのはどんなことなのでしょう。

「僕はプロ野球の中日ドラゴンズのファンなんです。野球の試合を観て、ドラゴンズが勝てば嬉しいなと思いますけど、以前のように楽しいとは思わなくなりました。この生活が根底にあるので、腹の底から笑うことはありませんね」

唯一嬉しいことがあるとすれば、と福田は続ける。

「どうすれば妻の意識が戻るか、色々考えて試してみても、良い反応が起きたときは嬉しいです。幸せだな、とまでは思わないのですが、唯一僕の気持ちが落ち着くのは、やはり妻が良い状態でいてくれることですから」

「生まれ変わっても明美さんと一緒にになりたいですか？」

僕の質問に、福田は少しだけ笑顔を見せた。

「それはどうですかね。生まれ変わったら生まれ変わったで、別の人生があってもいいかなって思います。やっぱりもう一回生まれきてきたら、もうちょっとちゃんとした人生が良いなと思いますね」

もちろん来世でも一緒にになりたい、という答えを予想していた僕は、一瞬驚いた。そしてすぐに、美談を期待していた自分を恥じた。現世で妻のために人生の全てを費やし、無償の愛を注ぎ続けていることこそ答えだった。そのほかにどんな言葉も必要ない。

「今の人生は観念しています。こういう道が待っていたのだと思っていますね。妻は本来なら死んでもおかしくない状態だったのに、死ななかつたわけですから、それも運命だと思うんですね。せっかく命が助かったのですから、最後まで僕が世話をしないといけないと思っています。ひよっとしたら、こうなることが全て決まっただけで、運命として僕が彼女の世話をする人として選ばれたのかな、っていう気もするんです。そうであれば、逃れられない運命なので、受け入れようと思っていますし、投げ捨て

て別の所に行く気はないです」

福田は淡々とした口調で、しかし強い意志を込めて話す。その言葉は、二度目のプロポーズであると同時に、自身へのメッセージでもあったのかもしれない。

「開き直りじゃないですけど、今の状態がすごく大変な状態なので、これ以上大変なことはないだろうと思っています。不幸な状況だと思えますけれど、不幸は乗り越えられる人のところにしか来ないので、乗り越えるつもりでいます。絶望はしていませんよ」

取材の前日は、ふたりの十七回目の結婚記念日だったという。例年、特別なお祝いをすることはなかった。今年も同様に、いつも通りの一日を過ごしたという。もし妻が元通りになったら何をしたいかと福田に尋ねてみた。うーん、どうだろう、と言いながら彼は明美の方を見た。

「前のように喋って、旅行に行つて、そして一緒に美味しいものを食べたいね」

明美は何事もなかったかのように宙の一点を見つめ、ファアとあくびをした。

僕はもう一度、自分の愛する人が意識不明になったらどうするだろうかと考えた。やはり、すぐには答えが出なかった。だが、これは彼ら夫婦にしか起こらないことで

は決していない。僕たちの愛する人だって、ある日突然何かに巻き込まれてしまう可能性はあるのだから。

チャイムが鳴った。夕方のヘルパーが来る時間だった。僕は取材道具を片付け、立ち上がった。玄関まで福田が見送ってくれた。別れ際、そう言えば、と福田が口を開いた。

「妻が倒れてから泣いたことはないと思いますが、一度だけ泣いたことがあります」

それはどんなときでしたか、と僕は尋ねる。福田は言った。妻が倒れて一週間くらい経った頃でした。夢の中で妻が亡くなって、僕が葬式を出していたんです。そのときだけは、目を覚ましてから泣きましたね。涙がボロボロ流れて止まりませんでした。